

大神島の民俗変容と葬制墓制の変化

～民俗と葬法の変化について～

岡本 恵昭 (博物館協議会委員)

第1章 大神島について

大神島の概況

宮古島北方、狩俣集落から東方4kmに位置する小高い孤島である。お椀をかぶせたような形状で、面積、0.27km²、周囲2.23kmのほぼ楕円形に近い島である。住居は山頂部(遠見台)を背にした段丘面の平坦な部分に集合し、狩俣集落の東海岸に向いている。真南の方向に平屋で箱型の、整然とした縦並びの屋敷づくりになっている。

1980年代、島の戸数は18戸で、1戸当たりの人数は7人ほどであったと云う。食生活は芋が主食で、主に魚やタコ、イカ、貝類などの海産物を副食とした。必要な生活用品は、狩俣や平良の町でその海産物を売り手に入れていた。

大神島の交通

大神島の人々が宮古島へ行くことを「ウブズマンカイ……」と云う。現在の海上交通は、島尻漁港よりの定期船(ディーゼル船)、或いは自家用船による往来がある。以前は丸木をくりぬいたクリ舟、或いは杉板を繋ぎ合わせたハギ舟、いわゆるサバニが狩俣の浅瀬からでていたが、後にサバニにモーターを付けるようになり、狩俣と島尻の港を利用した。1970年の聞き取りでは、サバニは3～4艇が連絡船として利用されたと云い、また昔は天馬船もあったと云う。

大神島に学校が出来たのは、明治37年頃である。「地域を語る一大神の巻一」(平良市史だより 第7号 昭和55年)に依れば、当初、狩俣の小学校に通うのは3・4年生の2年間だけであり、小学1年生、2年生は島の民家を借りて勉強していた。(狩俣栄吉氏)大神の最初の学校が廃校になって、新しい学校が出来るまでに20年余りの年月がかかった。最初の頃の先生は狩俣の人で「新里新寛氏」であり、次いで代わりの先生が狩俣から通ってきた。狩俣の学校へ行くときはサバニを利用したが、風のある時は帆で走り、風のない時はサバニを漕いだ。生徒は主に狩俣の村に下宿して学校へ通い、土曜日に自宅に帰る時は遠見台のある丘に行き迎えの船を待った。迎えには子供の親が狩俣の北の浜まで舟を出した。風が強くて舟が出せないときは、子供達は泣いていたと云う。遠浅の時は浜を歩いて舟まで往来したが、舟の往来は主として学校関係で、我が子の送り迎えなどで往来していたので、交通の苦労は大変なものであった。1980年代の調査では、狩俣での下宿代は1月に2円程度で、大神島からタコや魚をお土産として持参したという。

その他、島の人々が必要な生活物資や日用品を買い求める為にも、舟の交通は大

切であった。魚を仲介人に売ったりして現金に換え、その金で米・粟・芋など必要な日用品を買い入れたり、物々交換の取引をして物資を入手した。

日常の食事は芋と乾燥したタコ、魚などの汁やミソである。魚は城辺（長北部落）などで物々交換したり、舟を長間の浜（ナガマバー、ウプカーズ）に着け、魚を持って各家をまわっての行商であった。売れ残った魚やタコなどはすべて、薪で煮炊きして乾燥させる干し上げ、いぶし上げの方法で保存食にした。貴重な換金食物であるナマコ、海草、貝などは重要な日常食でもあった。作物は畑作が中心で、粟や芋を生産していたが、野菜や芋麻なども裏庭などの小さな空間を利用して作っていた。サトウキビも作っていたが、黒糖作りに使われる程度のものであった。生活は厳しく、小さい畑や海を相手に昼の海、夜の潮干狩りと働きつづけても、ゆとりある生活は出来なかったと云う。（島尻ヨシノ先生の「回想録」）

※高野移住について

「1992年（昭和37年）に「勸奨移住」と云って、島の二男や三男などの若い二才（青年）達を中心に、平良市北方にある大野越と呼ばれる所への移住が進められました。長男であっても生活福祉を受けていた人達はともに移民や移住の対象になりました。それに伴い学校の児童生徒も、市立宮原小学校や市立鏡原小学校へ転出し、移住の年、大神の小中学校の60名の在籍数は40名余まで少なくなりました。本島への移住や沖縄、八重山などへの島の人々の転出は、島の人口を減少させたのです。」（島尻ヨシノ氏）。

高野集落は、大神島を中心に多良間村の18戸、水納島の17戸、狩俣村から2戸の人々が移住して出来た集落である。名称は当時の民政府の移住計画に依るもので、各離島からの40戸の入植計画に従うものであった。一戸の宅地面積は150坪、耕作面積は1町5反与えられた。道路は文字通り整然と区画されている。人口は226人（男110、女116）、世帯数は45戸（昭和59年）、半農半漁の集落で、漁業戸数は23戸で、専業が15戸となっており、農業専業は7戸のみになっている。主としてサトウキビや葉タバコを生産している。歴史のある白川湾を浚渫、埋め立てて高野漁港が整備され、車エビ養殖場も建設された。上水道や電気が大神島に普及したことによって、島は時代の進化と共に近代化され、本島の高野部落の生活環境と格差のない合理化の時代を迎えることになった。

上水道、電気工事、通信の近代化

「かつて、島の人々は水資源を天水や島の三カ所の井戸水にたよっていました。堀井戸のフタガーは塩味のある甘水（井戸水）でしたので大切にされました。昭和55年に、海底のパイプラインから水道と電気を送ることが出来るようになり、それは島の人々の生活に一大転換をもたらしました。」（島尻ヨシノ氏）

一世紀にわたる個人の体験の積み重ねは、近代化され、整備の進む方向へと展開する宿命にある大神島に関わる事である。宿命、すなわち運命共同体の解体は、住

民一人一人が持つ信仰の変化であり退化（風化作用に依るもの）である。消滅していく島、消えていく共同体の島が足跡としてのみ残るのであろうか。

「私達は、伝統のある島が、若い世代に受けつがれ発展してもらいたいのです。狩俣村から電気や水道が海底でつながったことにより、島の外からの文化や言語や習慣も流入して来ました。かって、自治会長さんが自家発電に因る電力エネルギーを起こして各家に分電したとき、島の人々は電気エネルギーの変化と能力、文明の灯の話題に花を咲かせました。それも昔のことです」（島尻ヨシノ氏）。

今日、風力発電などに因る多量の電力は、文明の可能性の全てを満足させた。電話、有線放送、TV、ワープロやコンピューターの利用を可能にしたのである。

「区長さんや島の自治会長さんが、水を求めて自分のくり舟で対岸の狩俣とか島尻の浜まで行き、市の援助による上水道の水をもらい受けて島まで運び、家ごとにバケツの何杯分とかという風に分配することもあったそうです」（下地豊吉氏）。

水を天からの恵みや井戸水からの恵みで受けたあの順番待ちの島人の忍耐強さや共有性は、今日では昔の語り草である。文明は不合理である水汲みの労力を改善し、水の受容を普段の生活に日常的にしてくれた。この日常性は、利己的個性の発生、自己利欲の追求につながり、これを善とする風習に変えてしまう。しかしながら今日では、大神漁港の改修整備工事によって海上交通がよくなり、定期的な往来が出来ることはすばらしい事だと云うことになった。定期船に依る学校関係者の往来、島人の往来、物資の流通など、宮古本島と変わらない生活文化、すなわち文化の質の共通性の受容なのである。

※大神島の開発と自然保護

今や大神島も全県的な視点で開発工事を進展させなければならなくなった。島の開発プロジェクトは、どこまでも自然との共生の中で、島民の生活の安定と利便性を進める為、交通、航路、港湾の整備と島内一周道路の建設、通信や電力対策、海防や台風対策など、自然災害からの予防に精力的に努力を重ねていかねばならない。島のアイデンティティーを確立し、形成構築するための近代的技術に基づく政策は、島の外形の安定性や島民の安全性の機能を充たした。これが近代性というものであろう。しかし、大神島は「神位高くセジ高い島」であり、宮古のウブ島の始まりを創生したという島の神話と伝承には偉大なものを感じる。聖なる空間が島全体をつつんでいるのである。運命共同体の「イーサドゥー祭」＝（住み良い里）・（ミヤーク世）という想的な祭りは古代の始源に帰納する。タマシイを「タマ（玉）」と呼ぶ言葉にも、魚や貝タコの足一本一本にも宿る精霊のようなシャーマンのスピリット（生霊・聖なる力）がある。海の幸であるタコの燻製又は魚の分配を共有的に意識する神祭りは、すべての祭祀行事の細部に宿り、エネルギーを分散して無限である。イーサドゥー（イーサドゥー祭）の魚の村人への分配は、まさしく「イス（魚）のタマの分け前を神々が与える世（ヤミ夜）」と考えれば、そこに原始共同体の島人のアイデンティティーの平均化、共有性が一つになって存在すると云えよう。開発は、

その共有性をときはなしてアイデンティティーを無力化する。そこに、自然は「神々が死んでいく姿」を見せてくれるであろう。開発とは、結果として自然である。

以上の考察の基本的なものは、島尻ヨシノ氏が島尻メガ氏から教示された伝承の「記録ノート」資料を活用したものである。

第二章 大神島での死の儀礼

※死者の受け方・迎え方 異常死（キガズン）の葬（ハフリ）

昔といっても昭和の初めから中頃まで、1960年頃までの事例を記憶の中から掘り出してみると、病院での急死や海での事故死、或いは島内、家庭内での事故死、首つりなどの自殺者、事件にまきこまれての死者については、分別して葬式をした。即ち通常死、平常死に対して、異常な死に方をした者は、「異常死」・キガズンとして区別され、穢れたものとして処理される。以下は筆者の聞き取り調査・立ち会いで体験・観察記録に依るものである。

※異常死の葬式の方法

キガズン（穢れのかかった死者・死体そのもの）は、大神島でも同じように遺体を家屋の中に入れず家へも連れて行かなかった。病院は、穢れ（ケガレ）た不浄のブソウズ（穢れる場所）である。つまり病院での死者も異常死になる。島の外からの死者や事故現場からの死者も島の西側の浜辺（ニスヌ浜や島の定まった寄合墓）や砂浜の辺りで仮安置され、干潮時に合わせて葬式（埋葬）をし、海岸の砂浜に埋めたり、島の西方の崖の影にある洞窟に死者を葬る（ダビ・ステル）。即ち風葬の形式でキガズン墓の中に収める非常に簡素で薄葬なやり方でのキガズンの処理がなされる。

※病院での死（昔はキガズン）

大神島での病院への往来は、不浄な場所へ出向くという観念がある。神のいる島から身体の病気の治療に通うことはあまり良い事ではない。病気が自然に回復、本復するに、死者が発生する空間を共有する病院は「ケガレ」の象徴的な場所であるという古代性があるようだ。病気が汚らわしい、不浄の気の低力の形態にあること、伝統的に死がケガレの等質的な観念にあること、古来から死の現実を病院から悪く想像することから、ケガレの枯れる病気の身体をケガレ化身、フー（運氣・運命）の降下現象、アクマ・マジムの化身として病者を観察することは南島の人々の病身論にある特徴である。病院で死ぬことは現代ではあたりまえのことで、病院で終末を迎え、不幸にして死の現実を得た死者の身体は、日常死、正常死（現代の医術をつくした限りある生命力を全うして終えた死体）として、家族の住む自分の家に帰される。そこから死の儀礼に入る。病院では、遺体そのものの身体処理であり、アルコールで清浄に変化する。死者から出る生理的液体、糞、小便、鼻血、耳から出る液状なものを綺麗にして、身体の湧出する場所にとどめる。死体の法医学的処置、

死因の判断や診断の見解も、病院の内部にある死をとりまく環境で、正常死＝自然死老死、異常死、毒殺（農薬や劇薬による中毒作用に原因する死）など、事故死の分類が派生する。しかるに水死なども、事故原因や自殺的な心象風景、結果現象の異常さを尺度にして人々は異常死を観念するが、今日では、法的処理が評価されて、日常的死体＝自然死の処理と同じく儀礼は進められていく。「伝統性」は負を背負って日常的に普通な死体を化粧して、葬礼の儀礼を進行させる。進行儀礼は、常に家を中心に出棺する風習に変化している。

今日では、家の体面、死者の人権を評価することが優先され、異常死の取り扱い方は不問に秘されている。

大神島での葬儀の変遷について

島の人間が病院や島の外に出て死を迎えると、葬式が島をあげて行われる。今日ではあまりあり得ない事例である。移住者は、島の伝統性を守りながら近代化された葬儀屋の荘厳な飾りのある祭壇で祀られ、本土化された葬礼の進行に遺族達は涙を流すことなく、あわただしく進行するマニュアル化した儀式で終了する。島の内部では葬儀屋の手順で埋葬する。島外での遺骨は、告別式を自宅で行ってから村の共同墓地へ埋葬、納骨する。かつては、お寺はあまり関係しないので葬祭の儀礼や位牌など、その後の四十九日までの生活や祀り方などの指導がなかった。しかし現在では、交通の便が良くなっているので葬儀屋もお寺も参加する。お寺の指示で位牌をつくり、七日法要、開眼法要、四十九日の法要が島の風習でとり行われるが、年忌法要や祈願祭についてはユタが島内に出向いて祈願事をする。大神島では、基層部分に仏教の儀法が入ってこなかったため、外来宗教の受容は市内やら高野からの知人や親類による影響が大であった。島外へ出た沖縄本島や本土からの子供達の影響で、先祖供養の儀式が葬式の時にのみ行われるようになった。筆筒型の仏壇や電気式灯明など、仏壇や位牌の形も近代的なものの変えられ荘厳になっている。

宮古島では、古来、仏壇に本尊佛を安置したり三尊佛の掛け軸を飾っている家はない。沖縄本島でも少ないと云われている。本尊佛や内地での仏壇は、本土からの移住者かUターンに依る島の人、或いは本土出身の親が関係する。習俗の変化や本土化様式への変化は、本質や内容を伴うことなく、そのパターンと外形化に接する外圧のパワーのみがエネルギーとして残るということになる。

島の知識人らが信仰している自己宇宙的なカリスマ性を持った自然宗教の内圧からは、意識的に離れない。知識人や人々が語る「事故で死んだ人、つまり横死（異常死）」の人は極楽（南島では天国・神の世界と云う）に行けず地獄へ行く。生きているとき良い行い（善行・又は業）をした人は極楽浄土へ行き、たくさん神々から大歓迎されて昇天するということである。それも祖神の教えで、逆に悪い行いをしてきた人は、地獄の真っ黒な所へ連れて行かれて苦しむ。地獄も極楽も自分の行為次第だと教えられているのである。あの世へ行っても悪い行いばかりして暮らしている人は、生きていた時と同様に衣食住の苦しい生活をするといわれる。そのた

め、事故死とか早死にすると家族はあちこちのユタの家を訪ね歩き判断してもらうのである。ウヤガミの人達も島に祟りがあるかも知れないと云ってユタに判示させる。以上は長い引用であるが、ユタ（シャーマン）、神がかりと呼んで、大神では相性の良いユタを探し求め、2、3軒の家（ユタノヤ）に相談し、ユタの判断（ハンジ、アカシ）をもらうわけである。したがって、市内や伊良部島のユタを訪ね歩く。ユタの判事（口寄せに依り判定する）の多くの事例の中で、共通の、しかも島の共同体に係わる神託に運命をまかせるのであるが、島の出来事の云々を即時的に、ユタの神がかりに依る判事の一言で決定する。以上の事を具体的に述べている。大神の祖神（ウヤガミ 祖神と名付けられた神女）と明かしを示したユタの言葉で、島人が島の行事やウヤガミ祭りを信じないから、変死が出てきたりもすると考える。島の人々が以前のように信心したら島は幸せが多く訪れると云うユタの予言もある。これらの現実の島の近代化の宿命なのであろうか。考えさせられる問題がある。

以上の判事・予言（アカシ）は、ウヤガミ祭の危機を意識して、祖神祭の祖神達も信仰が少なくなっていくありさまを、ユタを通して指示されアカシとなった。古代日本の巫女、神女の王権にあたる神託・信心の判事で共同体は揺れ動く。底辺の意識は島の共同体の解体につながる。そして「祟り」、「厄病」のある不幸な事情、事柄は、ウヤガミの係の人がウヤガミに祈願させて、その家族と共に良く相談して祈願してあげる。又、島にかかわりのある祟り、厄、凶事、病気や事故があると、各家庭から集金して祈願する。積極的な呪術であり、願い事は島共同体で解決しなければならないという感情であろう。

※死の別れし葬法について

祖神達と別れの儀式—死への不参加

※司やウヤガミ達の儀礼について

島で不孝にして人が亡くなるとき、司達やウヤガミ達は葬式のある家には近づかず、亡くなった家の東の方に立って逆手（左手のこ）で手を振り、サヨウナラという意味の言葉をとなえて見送りする。今日でもこの習俗は変わらない。島尻村や狩俣村でもウヤガミは死のブソーズを嫌い、ケガレに接しないようにして単に家の周辺で手を振るのみで、拝みなどはしない。死者供養とは無縁である。これはウヤガミとして一生ついてくる聖なる神を受けた身体は、生涯にわたって不浄に近づかず、不浄を受ければケガレ、ヤナムン、ウプヤフ、ヤナフツ（フツ＝口）を除く呪術やソーズバリのイミズ（怨み）の修行をしなければならない。修行とは、こもり（クマズ＝籠もり）であり、ソーズバリ（精進）のことである。

島のウヤガミが逆手で手を振って死者との別れをするのは、「もう貴方はこの世の人ではないから、皆に未練などをもたずにあの世で幸せに暮らさないよ」と念じ（厄払い＝トウツキ）、ハライ口（フツバライとも云う）で話をして唱えていることを意味する。相手に知らせ（トウツキ）ているのである。

大神島では、大きな岩の下を墓に利用したりしていたが、今日では本島と同じように、コンクリートブロックの近代的な家族墓を作り先祖の霊を供養している。今から40年前、辺土名という家が、島の西の浜近くに、始めてコンクリートブロック造りの屋根の広い家族墓を建造した。次いで「島尻家の墓」が葬式の日直前に造られ、島尻メガの葬式が行われたと云う。その時から、あれほどに怨み嫌っていたケガレのあるお寺をお願いしてお経をあげさせたのである。現在では、ユタや不浄にかかわる不潔な存在であったお寺をお願いして来てもらい、法事をするように成った。そして、逆にユタを使わなければ、また坊さんに法事をお願いしなければ、死者が極楽にいけないというような考えも出てきた。

家族の人々は、家庭や家の中で死を迎えるのが極楽へ行けるものと思ひ、病人の気持ちを思いやって病院を嫌い、病院で死ぬのを嫌がるのである。今日でも遺体は自宅より出し、葬送は家座敷から出すことが大事な儀式である。

※葬式の日タブー <禁忌の呪術について>

①葬送の道変えをしない。

葬送の行列は島の西側にある風葬墓地に行く。昔は墓参りもろくにせず、通り道は定まっていた。往く道も復り道もそれぞれに葬送のタブーがあった。特に帰り道では、フキ（三又ウギヤヤ、キーマータ）という佛の呪具を作って屋敷の門に立てたり、墓地からの帰りの人の頭にまわしたり、墓の中に入ったりの人の背中をフキ（マータ）で三度叩いたりする。今では、門前や墓口に触れる人には塩を用いる。又、死者の家では水瓶の水を入れ替える。この事例は他の地域にはみられない。古くからの共同墓は、島の小高い山の西側にある岩陰墓や洞窟墓がその風葬墓地である。かつて宮古本島のあらゆる洞窟は、海からの風を受けて靈魂（タマス）を海上の彼方、あの世へと送り出す役目ももっていた。

②葬式の道がえをしない、後ろを振り返らない

葬式（棺）は自宅の門を出て部落の小路を通り、西の浜の洞窟墓に移す。そして石で囲いをする。本人の持ち物や新しい着物、下着、下駄などを添えて埋葬させる。あの世で生活するための米、粟、ミソ、塩、食器などの他土産品をそえる。これを（ツト）と呼び、遺体と共に供える。墓へ行く道、帰る道は決まっており、同じ道路を通る。行き帰り同じ路を通らなければ、死者が一人で家宅に往来することが出来ずに迷ってしまうからである云う。

本土の風習とは反対であるが、同じ墓参道を往来することが、本来古くからある習俗ではないだろうか。同じ道を戻らないと云う「道違い」をして帰り道を変えるということは、死者の霊が、迷わずに落ちていて、生者の後を追いかけてこないようにするということであろう。又、帰り道で転んだり驚いたりするとマブイを落としてマジムヌに取り憑かれると云われている。後ろを振り返らないこと、転ばないことはタブーである。

その他ウヤガミには一切かかわらない、御嶽には近寄らない、産屋には行かない

等のタブーがある。

※大神島の墓参り風習

葬式で歩いた道を通して墓参りをする。旧の正月十六日の墓参り行事でもこの葬送の道を通る。通常、墓地は清掃することなく近づくことさえもない。墓地を畏れる風習は本島と同じである。墓地＝死者の居場所＝生きた人々が行くと崇りがついてくる場所という図式は全島的なもので、信仰云々を問われるものではない。しかし近来は、墓の年祭り「旧正月十六日祭」や「七夕祭（タナバタ）」前後、「盆」の迎えの日までに、各家庭や一門達は朝早くから清掃作業を総出で行う。道や周辺の雑草が取り除かれて墓庭が綺麗になることは特筆に価する。この昔の慣習の変化を、大神島に住んでいる人々や島から出て県外に住んでいる子ども達は喜んでいる。近代化の流れの中で、合理化された祭祀儀礼や死者（先祖）儀礼などの行事の変化は、当然の成り行きであろう。

大神島の現在、島の移ろい—変わりつつある祭祀—

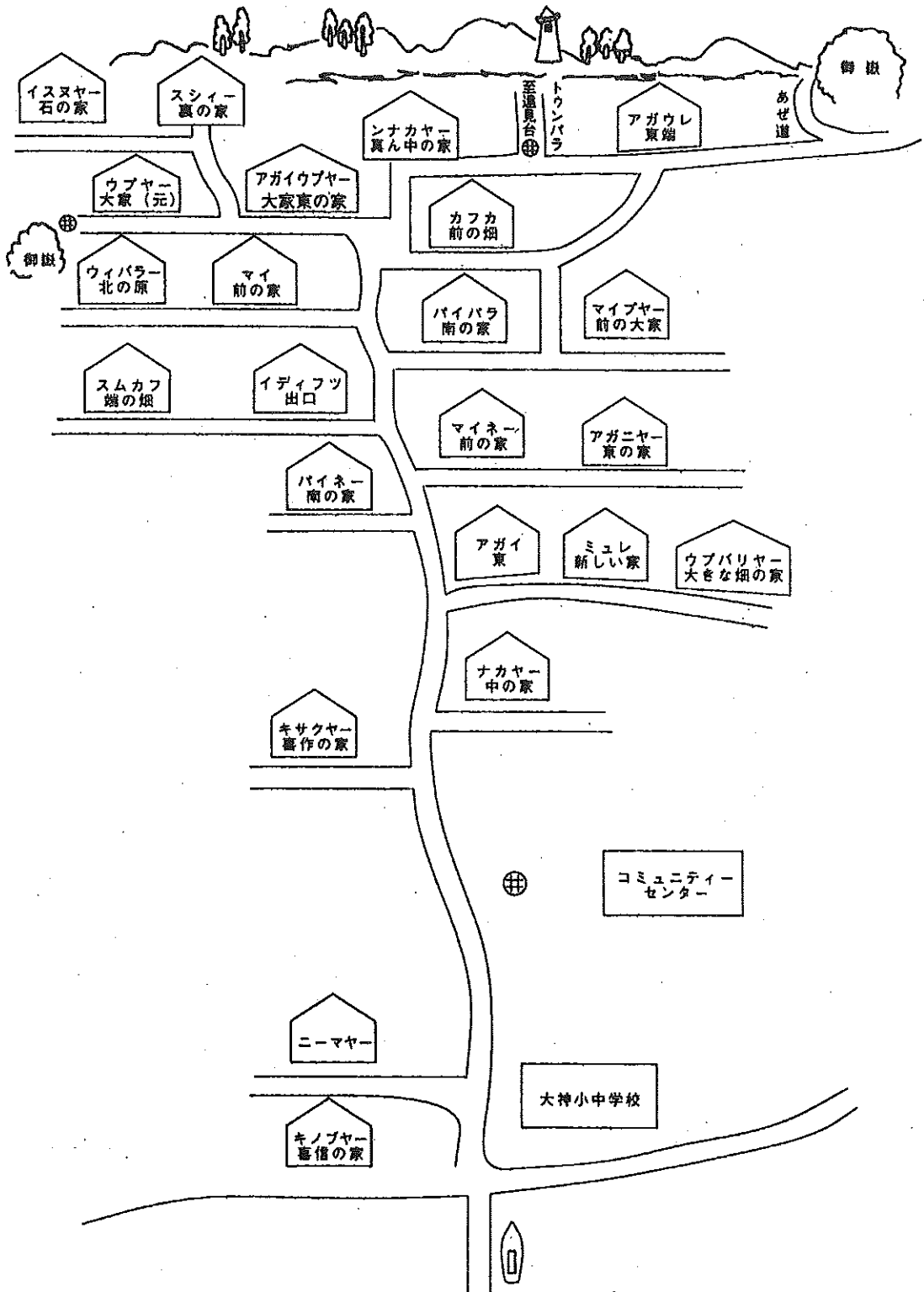
島尻ヨシノ先生は「回想録ノート」で下記のように述べている。

「小さい頃から見つめてきた島の民、祭りや祭司組織の変化が、だんだんに形式的になりつつあって、旧来のありのままの祭り—祭祀—については、祭りの日取りを人々に通知するとき、身の廻りや島中が厳守したタブーや尊厳さを持って受け、身の引き締まる思いで海の幸ある彼方から、大世が運ばれて来るような豊かな心待ちがしたほどでした。何となく心も清まり、清められている気持ちになりました。昔のようにひんやりする位の尊厳さが感じられないのは何故でしょうか。時の流れに皆の心は、時代の変化に流されて変わって行くのでしょうか。」

死者の魂（マブイ）の「成佛」する（佛となる 往生する）と云うのは、ここでは、自然宗教の中で発生したものである。無常の世の中で変わり行くもの、変わらない不変的なもの、変移するもの、これは時間の中で渦巻く流れがあり、空間の変容にも変わらないもの、変化して真理と輝くものの現実なる神々がある。大神島の神々の姿をみるというのは、例えば岩やビーチロックがコンクリートで固められても、神はその力を守りぬいて「頑固＝保守」に存在することということである。すなわち、そこには近代化を阻むものが存在するということである。近代的に日々進歩して経済的な豊かさを至上とする人間の志向性とは正反対に、近代化を疎外するもの、即ち非日常生の儀礼やタブーについては、島共同体の精神的なアイデンティティがある。唯、この島が今日まで精神の拠り所としてきた「神観念」はウヤガミ信仰を中心としたものであるが、仏教やキリスト教の信仰の介入のなかった唯一の「自然信仰」「自然宗教」が、その“島”の精神史の中にあるということをもまず考えなければならない。

大神島の屋号 (1991年現在)

明治学院大学 椎野宏美・由企衣 (作成)



第三章 大神島の祭祀行事

1月～5月までの祭祀行事の記録である。祖神祭・イイサドーについてはタブー(禁忌)として不問にした。この調査は、島尻ヨシノ氏が大神島出身の故島尻メガ氏から教示され記録した『島尻ヨシノ回想録』に基づくものである。他の地域と比較して数少ない行事にこそ共同体の古い本質的な素地を発見する思いがする。

行事名 (タミニガイ)	内容	場所
①月の1日願ひ	五穀豊穰・健康	御嶽
②ユースタミ	果報・大漁・豊作	
③タスキブン	五穀豊穰・健康	
④崇り(タタス)ニガイ(ヤフニガイ)	厄払い	

上記の行事は毎月行われる祭祀行事である。毎月1日(ツイタチ)には各家庭から米や塩などを出し合い、4人の神司、5人の島司が各家でお祈りする。ユースタミ願ひ、タスキブン、崇りニガイを行う吉日は、ユタ=カンカカリヤに判示させ、島司(スマフタヤ)に相談して決める。

その他の祭祀行事(旧暦)として、1月には旧十六日祭があり、3月には虫流し(ムスルムン祭)とサニツ祭がある。1月の「旧の十六日祭」には身内が揃って先祖の神様のお祝いをする。3月の「ムスルムン祭」とは畑の作物に付いている害虫を木の葉の舟に乗せ、神司が海へ流す作物の厄払いの行事であり、「サニツ祭」は島の人々が健康であるようにと、若者たちが浜辺の蔓草と泥をかぶって部落内を歩き厄払いをする行事である。1月～4月までの間にユースタミ、タスキブン、崇りニガイを行っていない人は各自で自由にユタ=カンカカリヤを頼み、各家庭で祈願行事を行う。

1月から4月までの期間は、今年の村や各家庭の平穏無事を祈願する月である。神司の人達はユタを訪ね、村についての判示をお願いする。又各個人も自分の家族の事が知りたいときは、ユタに判示させ、今年度のタスキブン、ユースタミ、崇りニガイ等で神司の人達に祈願をさせる。崇りについては、明かしたユタを通して祈願する。ユースタミやタスキブンについては、酒やさかなを用意して、本年も今年と変わりなく幸せを下さるように、と村の神司を頼んでお祈りさせる。不孝にして村やある家庭で事故とか病人が出ると、村人達が、祖神を粗末にし願ひ事をしないから崇りがあるといわれる。それは祖神を信仰させる事により村の秩序を守り、人々が気楽に生活出来るように、との願ひからだと思われる。要するに、邪心を払

い皆の心を清める神事だと考え、祖神は、島に生まれた人だけでなく、関係のない人でも愛し守ることと教えているのである。

祖神はいろいろ神歌や動作の表現を通して心を教えている。心を教える方法としては、神歌を強く弱く唱えたり、また音を立てたりして人々の心を集中させる為の動作をする。さらに、祖神自身も警備のためいろいろと行動する。

3月3日になると、赤飯を炊き、子供たちを浜に連れて行って汚れを祓い、健康を祈願しながら白砂を踏ませる。そして持ってきた赤飯を子供たちに食べさせ、次に潮干狩りをする。その日の満潮は、かけっこでもしてくるのかの様に早いので注意するようにと言う。

3月には、吉日を決めて害虫を流す行事も行う。吉日は、島司＝スマフタヤの人が決める。その害虫流しのことを、ムスルム願いといい、浜辺へ行って神司の人達が木の葉で船を作り、その木の葉の舟に畑の作物についていた害虫を捕って乗せ、海に流す。そして「豊年豊作」と「村人達の健康」を願うお祈りをする。その時は、村中の人達が浜へ集合してお祈りをする。それが終わると4～5人の大人達が、つる草や粘土をかぶり、村中を歩き各家庭のお払いをする。子供たちが言うことを聞かないと、つる草や粘土をかぶった大人達が、追いかけて泥をつける。大神のムスルム祭りのことを、島尻ではパーント祭りといひ、地域で言葉の違いがあるが祭りの原点は同じである。大神島では3月の吉日に行い、島尻では9月に（3日間）執り行われる。大神では、30数年前までは裸になり、粘土を体に塗り、村中を歩き厄払いをして果報を願っていたのであるが、今では簡素化され、着物の上からつる草をかぶって祈るようになった。それがもっと簡単になり、浜で祖神司役がお祈りをするだけになっている現在、それも時の流れと共に人様の心も流れに沿っているのではないだろうか。

5月になるとユーグイ（世乞い）・ユームテル祭り、別名ソナフカ祭りがある。

大神では豊（ユ）の神様は、盲の神様だといわれ、ユーグイの日には、夜になっても9時頃までは灯りをつけない。明るくしていると、豊（ユ）の神様は、眩しいと云ってその家にはユを与えずに戻って行くと言われる。それで9時頃まで家の中を暗くするのである。それから夕方になると、島司の係の人は子供たちを集め、家々の庭に輪をつくり、麦・粟等の茎を束にして火をつけ、燃えている火の回りを廻りながら、「ユウコムインムミヤラビマイのヤーと、スシのヤーとサオキもしくばりマクしくばりユームテル、ユームテル。」と島司の後から大きな声（プークムイのウタ^{ウタ}）で復唱する。歌い終わると家人は、用意してあったミキや塩を島司に渡す。島司は庭の燃えている火に振りかけ豊（ユ）を与えていくという。全家庭でのお祈

りが終わると、各家庭で準備してあった麦・粟・米等の大きなにぎりめしを村の真中にある広場へサオキとかマグで持ち寄って祝宴をもよおす。又、各家庭でも家族同士酒盛りをしてお祝いする。未明になると、十二支の当たり年の方向にある浜辺から石を持って来て、家の床あたりにおいて豊（ユー）を招くようにするというのである。

※島尻ヨシノ氏の「行事記録ノート」1990年 岡本恵昭 書写所蔵

- 1992年（平成4年） ① 7月17日／甲午・さんりんぼう
② 6月18日／六白・大安
- 1993年（平成5年） ① 6月27日／壬寅 ② 5月21日
- 1994年（平成6年） ① 6月12日／己巳・友引 ② 5月4日
- 1997年（平成9年） 不詳
- 1998年（平成10年） ① 6月16日／甲午・友引 ② 5月22日

参考文献

- 『南方文化の探求』 河村只雄 著 創元社 1999年
- 『続 南方文化の探求 薩南・琉球の島々』 河村只雄 著 創元社 1942年
- 「大神島の探訪記（1）（2）（3）」 星雅彦
（「琉球文化の研究」琉球文化社 大城精徳 1970～1973年）所収
- 『島尻メガ・ヨシノの大神島回想録』（島尻ヨシノ自筆ノート） 岡本恵昭書蔵
- 『平良市史』 通史編1・2巻 1977年・1981年
- 『平良市史』 民俗編7巻（1987年） 御嶽編9巻（1994年）
- 「沖縄の葬制と墓制について」 名嘉真宣勝
（『南島の墓：沖縄の葬制・墓制』（地域史協編 沖縄出版 1989年）所収
「宮古島における葬制用語の解説と研究」
岡本恵昭（「平良市総合博物館紀要7号」）
- 「神・人・死の儀礼」 岡本恵昭（「平良市総合博物館紀要8号」）
- 『琉球の方言—宮古大神島』 法政大学沖縄文化研究所編 東和社 1977年
- 「宮古島諸島学術研究報告⑩ 地理・民俗」 球大学沖縄文化研究所編 1966年
- 「琉球列島における死霊祭祀の構造」 酒井柳作 第一書房 1987・2001年
- 「宮古群島大神島における漁労活動—民俗生態学的研究—」 市川光男
（『今西錦司古希記念論文集』 探検編 昭和53年）所収
（おかもと けいしょう）